

第 47 回 SGRA フォーラム
「科学技術とリスク社会」

～福島第一原発事故から考える科学技術と倫理～

2014 年 5 月 31 日(土)午後 1 時 30 分～4 時 30 分

東京国際フォーラム ガラス棟 G610 会議室

【フォーラムの概要】

現代の巨大科学技術、先端科学技術は、人類に大きな恩恵をもたらす一方で、人間社会にさまざまなリスクをもたらします。

今回の SGRA フォーラムでは島藺進先生(上智大学神学部教授－宗教学/応用倫理)、平川秀幸先生(大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授－科学技術社会論)をお招きして、3・11/福島第一原発事故により露わになってきた「科学技術の限界」、「専門家への信頼の危機」などの議論を踏まえて、人間社会が恩恵を受け一方で、大きなリスクをもたらす科学技術を：

- 社会はいかに受け入れて行くのか？
- 社会が受け入れるにあたって、理工系科学者だけでなく社会学者、人文科学者が担うべき役割とは何か？
- また、意志決定に市民が関わって行く場合に、科学者と市民を結ぶ科学技術コミュニケーションは如何にあるべきか？

などをテーマとして、会場参加者と一体となったオープンディスカッション形式のフォーラムを開催します。

【フォーラムの趣旨】

3・11/福島第一原発事故以降「科学技術の限界」、「専門家への信頼の危機」などが語られてきました。

その多くは、理工系科学者・技術者に対して批判的なものでした。当然のことながら、「原子力村」と呼ばれるような、一部の専門家の判断によって決定される構造を見過ごすことはできません。

しかしながら、理工系科学者・技術者を批判するだけでなく「科学技術はわからない」「専門領域外だ」として、リスクの検証や社会的受容の是非の議論を怠ってきた社会学者、人文科学者の責任・倫理観も厳しく問われるべきではないでしょうか？

理工学的判断は、不確実性や所与の条件を前提として、ある種の「割り切り」や「切り捨て」を伴って行われるものです。そこでの判断は極めて重要ですが、それは「判断」の一部でしかありません。専門家が設定する「不確実性」や「所与の条件」が正しいのか、リスクの想定範囲が適切であるのか、不確実な状況、リスクを前提として社会的に受容するための議論や意思決定の方法は如何にあるべきか、などは社会科学や人文科学の範疇における問題です。

私たちが、福島第一原発事故から学んだリスクや被害は、単に医学的、理工学的な課題だけでなく、コミュニティーや地域産業の崩壊に見られるような社会的課題、さらには、どのようにリスクを受け入れるかは、最終的には個人の価値観－どのように生きるか－に繋がってくるものだという事ではないでしょうか。

今回の SGRA フォーラムでは、「科学技術なしでは答えられないが、科学だけでは答えられない問題」(Weinberg)を一つのキーワードとして、理工系科学のみならず社会科学、人文科学を専攻する各国からの若い研究者、一般の市民の方々と交えて、社会や個人に繋げる議論をオープンディスカッション形式で行います。

【プログラム】

1 時 30 分～1 時 40 分	司会:葉文昌(台湾)島根大学総合理工学研究科准教授/電子物理工学 挨拶:今西淳子(SGRA 代表/渥美国際交流財団常務理事)
1 時 40 分～1 時 50 分	<p>問題提起</p> <p>崔勝媛 (韓国)理化学研究所研究員/植物学</p> <p>私は、科学者という道を選んで以来、常に「今の社会での科学とは何か」を考え続けてまいりました。</p> <p>日本留学中には、「事業仕分け」や 3・11 東日本大震災/福島第一原発事故を目の当たりにして、「社会に貢献する科学」への疑問が深まってきました。そもそも、科学者が研究を続けられる原動力は好奇心にあるのですが、その「好奇心」だけでは、なぜ莫大な規模の予算が科学に投資されるのかは説明できません。</p> <p>現在、日本の研究所で一研究員として研究を続けてゆく中、「これからの社会にとっての科学とは何か」という命題に悩み続けています。</p> <p>今回の SGRA フォーラムの冒頭では、こうした私の一科学者としての想いを含めて、問題提起をさせていただきます。</p>
1 時 50 分～2 時 30 分	<p>対談:「科学技術とリスク社会」</p> <p>対談者:島 蘭 進 上智大学神学部教授 平川秀幸 大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授 モデレータ:エリック・シュッケタンツ(ドイツ) 東京大学大学院人文社会系研究科特別研究員/宗教史</p> <p>〔対談のトピック〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 福島第一原発事故から考える「科学技術の限界」、「専門家への信頼の危機」 ➤ 巨大科学、先端科学が生み出す「リスク社会」の様相 (生命科学なども含む) ➤ 「科学技術と倫理」の課題及び社会系科学者、人文系科学者の役割 ➤ 科学者と市民を結ぶ科学技術コミュニケーションの可能性 《島蘭先生、平川先生のコメント要旨は、後日掲載します。》
2 時 30 分～2 時 45 分	(休憩)
2 時 45 分～4 時 25 分	<p>オープンディスカッション</p> <p>ファシリテータ:デール・ソイヤ(ノルウェー) 上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科特別研究員 /グローバル社会</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 島蘭先生、平川先生と共に会場参加者と一体になったディスカッションを行います。
4 時 25 分～4 時 30 分	閉会の辞:嶋津忠廣(SGRA 運営委員長/渥美国際交流財団事務局長)

人間が科学技術を統御するために ——科学技術とリスク社会：福島原発事故から考える——

島蘭進

科学技術によって人間はこれまでにない力を獲得し、より幸福な生活を実現できるという観念は、現代社会の諸制度や現代社会に生きる私たちの考え方にしっかり根づいている。そもそも小学校から大学に至るまでの学校教育は、科学の知識と科学的な思考能力を身に着けることを主軸に組み立てられている。だが、いつしか社会は、科学技術が福利とともに害悪をもたらすことを当然の前提とする時代に入っている。リスク社会とはそのような社会だろう。そこでは、さまざまな科学技術がもたらす福利も害悪も含めて、それが将来もたらすであろうものについて予測し、評価し、判断することがつねに求められなくてはならない。そこでは将来世代にも十分に配慮し、長期的な見通しをもって科学技術を制御していくための知識と合意形成のシステムが必要となる。ところが、リスク社会においても、政治・経済の主導権を握る人々が科学技術を制御するシステムを組み立て働かせることに積極的に取り組むとは限らない。科学技術は政治・経済の目先の利害関心に引きずられたり、熟慮と叡智と合意による判断よりも競争に打ち勝つことを目指して進んだりする傾向を強めている。科学技術とリスク社会のこうした好ましからざる関係のあり方をどうすれば改めていけるのか。もちろんそうした問題意識をもつ科学者や自分・社会系の学者、思想家はこれまでも警鐘を鳴らしてきたが、社会体制は無視、ないし軽視してきた。福島原発事故はこうした現代社会の状況をよく表す事態として見ることもできるだろう。

科学の「外」の問いをいかに問うか 科学技術とリスク社会：福島原発事故から考える

平川秀幸

福島原発事故は、リスク社会としての現代社会の様々な問題を露わにしてきた。その一つが、リスクに関わる諸問題を「科学的」に処理可能な範囲に切りつめ、科学外的(extra-scientific)な問題をないがしろにしてしまう傾向である。たとえば福島原発周辺からの避難者への政府の対応では、元来、避難からの帰還や移住の選択は、放射線による健康被害リスク以外にも、生活再建全般に関わる多様な考慮事項があるにもかかわらず、あたかも放射線リスクの程度(被爆の線量レベル)のみで白黒つけられるかのような扱いが為されてきた。帰還するか否かの問題が、科学的問題を扱う原子力規制委員会に委ねられたのは、これを象徴している。子ども・被災者支援法でも規定された当事者の自己決定を尊重する民主的な意思決定プロセスもないがしろにされがちであり、いわば「デモクラシーを割愛して科学に逃げる」という構図も様々な場面で繰り返されている。背後には「リスクは科学的問題だ」「科学的に正しい答えを出せばみんな納得して帰還する」という思い込みだけでなく、事故被害の矮小化、賠償規模の縮小など、原子力をめぐる政治・経済的な利害が働いているのだろうが、「科学的」という表象がそれを不可視化している。「科学」では語りきれない問題、「科学」で置き換えたり覆い隠したりしてはならない人間や社会の問題にいかに定位するか。原発事故に限らず、現代のリスク社会における科学技術の「倫理」を考えるうえで、共通する課題であろう。

◇ 島 蘭 進 Susumu SHIMAZONO

上智大学神学部教授（宗教学、応用倫理学） 東京大学大学院人文社会系研究科名誉教授
【プロフィール】

東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学

近代日本宗教史、比較宗教運動論を研究し、とくに日本の19世紀から現在までの、新宗教の研究、特に、宗教文化が現代の政治的、社会的、倫理的争点とどう関わるかという課題を研究。

近年では、死生学の研究、応用倫理の側面から生命科学と倫理の問題、福島第一原発事故を契機として「科学技術と倫理」の問題などに多数の発言を行っている。

【主な著作】

『〈癒す知〉の系譜—科学と宗教のはざま』吉川弘文館 2003年

『いのちの始まりの生命倫理—受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』春秋社 2006年

『スピリチュアリティの興隆 新霊性文化とその周辺』岩波書店 2007年

『宗教学の名著 30』ちくま新書 2008年

『国家神道と日本人』岩波新書 2010年

『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂〈現代社会学ライブラリー〉2012年

『日本仏教の社会倫理』岩波書店〈岩波現代全書〉2013年

『つくられた放射線「安全」論—科学が道を踏みはずすとき—』河出書房新社 2013年

その他多数

◇ 平川 秀幸 Hideyuki HIRAKAWA

大阪大学コミュニケーションデザインセンター教授（科学技術社会論）

【プロフィール】

2000年 国際基督教大学大学院比較文化研究科博士後期課程博士候補資格取得後退学。博士（学術）。専門は、科学技術社会論（科学技術ガバナンス論、市民参加論）。

もともとはバリバリの理科少年だったが、理学修士をとったところでグれて文転。2回目の修士課程（博士前期課程）で哲学、科学思想を学び、博士後期課程ら守備範囲を、社会問題寄りにシフトする。98年末から2000年まで、（財）政策科学研究所客員研究員として、科学技術政策関係のプロジェクトに参加。

「リスクをめぐる政策、さらに、リスクを生み出してしまう技術や科学をどのようにして人間社会がハンドルをつけて動かしてゆくのか、方向づけていけるのかということ、また、政策決定や政策が科学に対してどういう影響を与えるのかということに関心を持っています。」（大阪大学HPから抜粋）

【主な著作】

「原子力事故の『途方もなさ』をいかに理解するか—ハンナ・アーレントの近代批判を導きとして」、中村征樹（編）『ポスト3・11の科学と政治』ナカニシヤ出版〔2013年01月〕

「3・11以降の科学技術コミュニケーションの課題—日本版『信頼の危機』とその応答」

菊池誠他著『もうダメされないための「科学」講義』光文社新書〔2011年09月〕

「科学は誰のものか—社会の側から問い直す」平川秀幸、日本放送出版協会〔2010年09月〕

その他多数

SGRAとは

SGRAは、世界各国から渡日し長い留学生生活を経て日本の大学院から博士号を取得した知日派外国人研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。SGRAは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがSGRAの基本的な目標です。詳細はホームページ (www.aisf.or.jp/sgra/) をご覧ください。

SGRAかわらばん無料購読のお誘い

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週水曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録していただけます。